

飯田恭研究会

— 経済史・社会史・環境史（農村と林野が中心） —

1. 研究分野

都市に生活する人々は、農村・林野と聞くと、それを直ちに「自然の息づく場所」だと考えがちである。しかし、農村・林野とは実のところ、人間がその時々を経済的・社会的要請に従って自然に手を加えつつ造り出し、また造り変えてきた「歴史的所産」なのである。この農村・林野の歴史（経済史・社会史・環境史）を、世界の様々な地域を比較しつつ研究していこうというのが、本研究会の課題である。ヨーロッパ（特にドイツ語圏）と日本が中心的な考察対象となるが、絶えず世界史的な文脈を意識することにしたい。

担当教員の専門は、近世・近代（特に17～19世紀）のドイツ農村・林野史および農村・林野史の日独比較であり、この（あるいはこれに近接した）テーマに取り組む学生に対しては、特に専門的な指導が可能である。

なお、本研究会における近年の輪読文献タイトル・三田祭論文タイトル・卒業論文タイトルの一覧が本研究会のホームページに掲載しているので、参考にしてほしい：

<http://www.clb.mita.keio.ac.jp/econ/iidaken/>

2. 学生への要望

研究するということは、厳密に言えば、新たな「知」を生産する（オリジナルな論文を書く）ということである。だがそのためには、まず先人たちが蓄積してきた膨大な「知」（＝著書・論文）を、労を厭わず読み重ね、それを精確に理解しなくてはならない。さもなければ、何がオリジナルな「知」たりうるのかも分からぬからである。その上で、自ら原史料を読んでそれを分析し、そこから新しい知見を産み出さなくてはならないのである。

もちろん、学部生の段階でこのような厳密な意味でオリジナルな論文を書くことができればそれに越したことはないのだが、学部生にこの水準を求めるのは酷である。そこで、求められる卒論の水準を次のように考えてほしい。

外国史を研究する人には、英文ないし研究対象地域の言語で書かれた最新の（あるいは日本で未紹介の）著書を読破し、それを日本の学界に向けて紹介する、というレベルの卒論を最低限求める。ドイツ語文献にチャレンジする人は

特に歓迎する。ドイツ語が未習だが、ドイツ語の文献にチャレンジしたいという学生向けに、三田でもドイツ語初習クラスが開設されている。積極的に活用してほしい。

日本史を研究する人には、自分のテーマに関する過去の研究文献を読破した上で、できる限り史資料の分析に取り組み、独自の知見を産み出すことを求めたい。史資料解読の能力を養成するために、経済学部では、松沢准教授によって「日本史史料講読」という授業が開設されている。これを履修することを強く薦める。

3. 選考について

- ① 募集人員：6名程度（他学部生も歓迎する）
- ② 選考内容：レポート・面接・成績表の提示
- ③ 選考基準：レポート・面接・成績表から、研究を遂行していく上での前提条件（明瞭な問題関心・勤勉さ・経済史等の基礎知識）がととのっているかどうかを判断する。